源氏系圖

太上天皇（だいじやうてんわう）

あふひの巻に位をゆづり給ひ、わか菜の巻にかくれ給ぬ。又みかどの御門あり　一書には桐壺帝ともあり

前坊（せんばう）

故院の御おとうと、葵にくはしくみえたり

秋好中宮（あきこのむのちうぐう）

母六条の御息所

あふひに斎宮にたち給ふ。さかきに都へ帰り給ふ。絵合に内にまゐりて梅つぼといふ。乙女に中宮にたち給ふ。御法に皇后宮にあがり給ふ　一書には秋宮　秋好ともあり

桃園式部卿宮（ももぞののしきぶきやうのみや）

うせ給ふよし、うす雲の巻にみえたり

槿斎院（あさがほのさいゐん）

さかきにかものいつきにゐ給ふ。うす雲に父の服によりておりさせ給ふ。桃園宮に女五宮とおはせ

ましかふ ワき付ニ撰とあり

三宮　院のひとつは醍醐也。摂政の小方よちるかふ殺でう母乃

巻に入れ給 ワき付ニ大家とあり

女五宮　桃園宮に住ませかふし。継がれにこそ

朱雀院　ワき付朱　母ハ弘徽殿太后

桐つぼの巻に春宮おはすひにれ位につき給をおはします

くらゐを春宮に譲。まつれ上にはみぐしおろして西山の

寺にすませ給。同巻六条院れ賀れ所に一院とあるは此の門也

今上　母承香殿女御

明石の巻に二歳どころ。おはしまする春宮。梅つぼの

元服。まつれ下にくらゐにつき給 ワき付今上

女一の宮　これの上にこそ

落葉宮(おちばのみや)　母ハ一条御息所(ごみやすどころ)

これの下に、柏木右衛門督(うゑもんのかみ)の北方になり給、後(のち)ハ

夕ぎりの大将うつしとりたまふ

二品内親王(にほんないしんわう)　母ハ先帝源氏宮(せんていのげんじのみや)

これ上に、六条院にわたりて、月下に二品し給、柏木の[illegible]に

ゆるかをるをうみ給へり　わかなに女三

女四の宮　これ上にこそ

春宮(とうぐう)　母ハおしの中宮

これかよりむまれ給ひ、月下に坊(ぼう)にゐ給ふ

式部卿宮　　母ハ明石中宮ニ

にほふ宮の巻に。夕霧の中君をえて。六条院の寝殿を
やすみ所にし給ふ。二の宮といふ人のちに式部卿

兵部卿宮　　母同上

これ下にむまれ給ふ。匂宮の巻にげんぶくして。兵部卿に
なんぜ。むらさきのうへやしなひ給ふ三の宮也　にほふ宮

若君　　母宇治の中君

やどりきの巻にむまれ給

常陸宮　　母ハ更衣

匂宮の巻に。夕ぎりの大将のむすめのうへちあひし
給ひし日。兵部卿宮にみゆへをされし人。四の宮ところ也

中務宮

母ハ同二妻室

同の皇子此日夕霧の大将まの紀よきて車よのを給しめの家おづまやよ大家のれまやされ時まいり給ふ又やどりきに上野のみやと殿上よさかれひ給し人

一品宮

母ハ同二妻室

これもむらさ紀の上やしなひまて六条院の南の町よすまゐ給ひ匂大将心かけまゐらせてまつりし人

女二宮

母藤つぼの女御

やどりぎよ内のれさるまで匂大将をむこよえ給

六条院

母きりつぼの更衣

七歳よて源の姓を給て十二よて元服げんぶくし中将

紅葉賀に正三位中将如元同巻に宰相中将如元葵に大将、須磨の巻にハ浦にくだり、明石の巻に都にかへり給ひ官もかへりて乃ほかれ権大納言にあがり、みをつくしに内大臣、薄雲に位そひて、牛車のせんじをかうぶり、乙女に太政大臣、藤裏葉に太上天皇の尊号をえたまふ　わき付源

一夕霧左大臣　母ハ葵ノ上

みをつくしに内裏の昇殿、乙女に元服してあさぎにてくらゐの階、同巻の秋除目にかうぶり給ひ、朱雀院行幸の時侍従になりたまふ、玉かづらに中将、藤袴に宰相中将如元、藤のうらばに権中納言、若菜上に右大将、同下にて大納言にて左大将に轉ず、匂宮の巻に右大臣大将如元、竹河に左大臣辭ス大将ヲ

薫右大将　母朱雀院女三宮

柏木の巻に生れ給ふ。匂宮の巻に元服して四位の侍従となる。その秋右近中将 十四歳 同巻に三位し宰相になる 中将如元 竹河に中納言。やどり木の二月あ給し梅に。権大納言にて右大将を兼ず

明石中宮　母あかしのうへ

みをつくしの三月に明石の浦にて生れ給ふ。松風に都にのぼりて大井にすみ給ふ。薄雲に六条院へむかへ給ふ。藤のうらばに春宮へまいりて。あげいきやさこえしも。御法に中宮。匂宮の巻に皇太后宮

右衛門督（うゑもんのかみ）　母三条上（はゝでうのうへ）

これハ朱雀院の御かど（が）の時、ミやつかへてまつりき。女楽（ぐ）の段、よこぶえ吹ところ、白家の巻にのせられ日出仕をし人、又よりふ若の家、宇治（うぢ）まで紅葉ころ狩し日、中家の流れをひきてまうでられし、おげまれにこえくり

中納言　母藤内侍（とうないし）

六条院夜（ちよ）の御かとむかへてやしなひ給ひ、次に君、朱雀院（すさくゐん）の御かど（が）の御ぐおほせしき、蔵目（くうまち）あまた君と同じくまいりのぼりし、御下にころも、白家の巻にめのりの日、太政のくどかさなじく出仕（きうし）をしく

右大辨　廿三条上

みな公家の參りは。のうちれ日出仕ありし人志ねがもと
まうぢんまいりつるよしこゝ也。見られ下まうす者也と
いへり

侍従宰相　廿淮どもおし

志ねがもとに。白家の名川をおうでの時。宮所へまいりき

ふらし人

源宰相中将　廿三条上

もとハ蔵人少将行河に三位中将。同巻に宰相中将。
志ねがもとに権中将といへり。又まほろしの巻り。
おなじ雑にそへふくら發上しのふといへる。此人でりや

頭中将（とうのちうじやう）　母薮内侍

竹河に源少将といへり。やどりきに白家六の君よりうひそめ給ひし時。ちゝおとゞの使にまゐりて。と侍りし人。椎本（しゐがもと）に頭中将（とうのちうじやう）といへる此人なるべし

四位少将（しゐのせうしやう）　母三条上

一条家（かんの）なるやミの時。横河僧都（よかはそうづ）のもとへ中宮につかひ。きし人。竹川に兵衛佐（ひやうゑのすけ）。しゐがもとに蔵人（くらうど）兵衛佐といへり

童（わらは）　母誰ともなし

やどりきに今上（きんじやう）の女二の宮藤（ふぢ）のえんし給し時。笙（しやう）ふきし人。ちゝ君とあるべし

春宮女御（とうぐうのにようご）　母三条上

春宮女御

匂宮の巻に東宮へまいり給

中君　母おなし

二の宮のきたのかた

三の君　母藤内侍

四の君　母三条上

五の君　母おなし

以上三人夕ぎりの巻にみゆ

六の君　母藤内侍

やどり木に匂宮の北のかたになり給

蛍兵部卿宮

もとハ帥宮也。乙女に朱雀院の行幸の時。兵部卿と見ゆ

うせ給へるよし紅梅(こうばい)にみえたり

侍従(じじう)

母は上のごとし

梅(むめ)がえは六条院ようちのはつれまて御本(ほん)とかいぞ

一人

童宰(わらはざさと)

同

此二人ハれ下に朱雀院の御賀(が)のまつりに万歳楽(まんざいらく)

宮の方(みやのおんかた)

ましいのふ

母は紀だし殿のうへ

父(ちゝ)うせ給て後母君はぐして按察(あぜち)大納言のもとに

すみ給ふ白兵部卿宮ぐるしずゞろ給し人

四の宮 母麗景殿女御(れいけいでんの)
もみぢの賀にわらはにて秋風楽(しうふうらく)まひたまひし人

帥宮(そちのみや)
ほたるに六条院の馬場(むまば)のおとゞにておはれ給ふの宮
すまひをとりてえしありし人

八の宮 母大臣女
宇治(うぢ)にうつり給ひし橋姫(はしひめ)のまきにこそうせぬる
女と申さきわき付ハ

総角大君(あげまきのおほいきみ) 母大臣女
あげまきの巻にうせ給 わさは大

中君(なかのきみ) 母おなじ
あげまきの巻に匂宮にあひて早蕨(さわらび)に二条院へうつる人

られぬよし　わき付中

浮舟(うきふね)　母ひたちがうまれしこれなり

やどりぎにひたちどのゝはらにて東屋(あづまや)に宇治にうつる

てならひに小野(をの)にわたる　わき付浮

式部卿宮(しきぶきやうのみや)

あづまやの巻にむすめ見え匂大将によしきとらし人

かげろふの巻にやうをあへるよし見え匂大将のなかちといへり

侍従(じじう)　母りこのさゝのこ

宮君(みやのきみ)　母おなじ

父宮うせてのちおしれ一品(ぽん)のみやへまいり給(たまふ)

匂大将こゝろかけたまひし人

冷泉院(れぜいゐん)

母うす雲(ぐも)の女院

あらはには其家のおほむとしはれそくね。思れ下はたまひぬ

源氏十のれ子(みこ)どもにてききは冷

一の宮

母ひげくろの大臣の女(むすめ)

むまれ給ふよし竹河にみゆ

女一(によ)の宮

母致仕(ちじ)大臣女(むすめ)

一のミやよりまへあね

女二の宮

母一の宮におなじ

竹河に生(うま)れ給ふこれも一の宮の姉(あね)なり

一品の宮

母朱雀院におなじ

女一のミやなり。一品(ぼん)のよしかれ上にミゆ

女二の宮

前斎院（せんさいゐん）

あさがほともいはれさまにお給ひ斎院の御ぶくにより
ておりさせ給ふ女三の宮とあり

先帝（せんてい）

式部卿宮

もとハ兵部卿とまうしき女は式部卿となる也
后（きさい）だちの宮あり

薄雲女院（うすぐものねうゐん）

きりつぼに内へまいり給ふ藤つぼと申也　紅葉賀（もみぢのが）に
東宮（とうぐう）生れまして女院をうらみてさまをかへ給ふさりまて
りせいハおとし給ふにおりて大上天皇にならぶかうぶり

源氏宮

こ侭きしを結ぶず。うす雲の巻よりみえたり

朱雀院。春宮の時よりまいりて。女三の宮をうみ給ふ

母更衣

つゞきあらしさう。きを結ぶよしみえし上にしるす

源中納言

かぢら侭ハ。右兵衛督。梅がえハ六条院よりゆうしうき

結し人なられ下ハ中納言ごころ

若君

朱雀院の賀のしがくの日。皇麞まひし人

中将

侍従

民部大輔

此三人ハいまうられ君大将の北の方となられし時父のまゝ
うちむ人まゝなりし人

鬚黒大将室(ひげぐろだいしやうのしつ)　母今の北方

大将にひとられけるし人
母按察(あぜちの)大納言女(むすめ)

紫上(むらさきのうへ)

十ばかりの時源氏の君むかへられ給後のうしろみて車
をゆるされし法(みのり)にかくれ給ふ

冷泉院女御(れいぜいゐんのねうご)
母同鬚黒北方(ひげぐろのきたのかた)

とうぐうに入内(じゆだい)しておはしける中の君といへりしかれども

常陸宮(ひたちのみや)

これの人よりいまうのうへを

阿闍梨（あざり）

椎が本の巻に醍醐（だいご）の阿闍梨

源氏の御八講（かう）にまゐりて。くさにいまうされれまくにて。

おもき病かくれし人

蓬生君（よもぎふの）

すゑつむ花の巻に。源氏の君にあひ。蓬生（よもぎふ）

ひたちのみやうけうひあふ　わき付末乙

摂政太政大臣（せつしやうだいじやうだいじん）

きりつぼにさ大臣にて。源氏の君の加冠（かうぶり）せし人なり。さか

木の巻に致仕（ちじ）。これより、みをつくしに太政大臣にて摂政し給。

うす雲（ぐも）の正月にうせ給　わき付太大臣

致仕太政大臣（ちじの）——母三の宮

きりつぼに蔵人少将。はゝきゞに頭（とう）の中将。紅葉賀に正三

位下。次ニ宰相中将。これより権中納言。うす雲
は権大納言にて。右近大将を兼ず。さかきは内大臣。若菜
うへ下には太政大臣。かしはぎの巻にて致仕の表をたてまつりたまふ。
うをかへるよしはよこぶえの巻まで也　わき付は

左中弁

あげまきにハ小山へ源氏のよむ人まゐりし人。若菜の
ゑんにハ中将弁ちがひまいらせて出でゐるも。此人なり
べし。夕ぎりの巻の蔵人弁とこれ人なりや

藤大納言

春宮大夫

此二人ハ源氏三条のみやへまうで給ひし紀。致仕のおと

どひきつれさせまいらせ給し人やがてうばはれ玉ふ道どおもふ。
とられたる左衛門督権中納言とゝさらに右京をこの人ゞ乃
是もやむごとなき事なりし左衛門督なるべし

葵上（あふひのうへ）　母三ノ宮

あふひの巻に夕ぎりの君とうとゝそうを給

柏木権大納言（かしはぎのごんだいなごん）　母二条太政大臣女四君

し女なた左近少将こてふの右近中将。うつせみの頭中将。

上る宰相右衛門督。同下る権中納言。柏木巻る卒の段

紅梅右大臣（こうばいのうだいじん）　母同上

すけ権大納言なりてほどなくうせをそ

はしまるわかいまそ韻かくされまる日毎かきこうる

ひし人ハおぼろげに元服し御音に弁少将となられ上に以弁だ
あしたに下に左大弁・柏木ハ大納言かゞらわかし時・一条の家
の北の方とかれし人・すじむしに冷泉院へまゐらしもこの
人なるべし・紅梅ハ按察大納言ところ・竹河に按大納言左
大将かけらる右大臣に成給ひくる文雅が本に白家の細帆
まうでのあれむ人にまゐりし按大納言もこの人成べし・やがら
まありまやにいらりて按察大納言どいふ不審

大夫

紅梅はげにまで無心の家・いまどき君のゐる思給し人

麗景殿女御　母故北方

紅梅に無家へまいり給・

中の君　母おなじ

左衛門督

床夏に夜給ひとゞめたるは此人にや

藤宰相

これ下よりものまつりの人さゝし人は二人とも夕ぎりのおとゞの六君に宮かよひそめ給ひし第三夜さぶらひし人や鈴虫に六条院にまゐるとて冷泉院にまゐりしも此人にや

頭中将

蔵人少将

此二人幻の巻に夕ぎりの君たちは殿上しあへる時おひぐしたりし人どもちの夜ごとのへや又夕ぎりの大将

条家よりの使として、此小侍をつかひまそ、ちたく
哀(あはれ)とおもひよりしとさくこの絵らしをとゞめさせ少納言兵
衛の佐、内侍、源大夫と侍りしも、いづれもまいられし時、兵衛佐、大夫
といへるも、これ人々なるべし

八郎君(らうぎみ)
まだおさなくして、踏歌(たうか)の時(とき)よりまいりて、おかしき人数のうちが
の行幸(ぎやうかう)に、賀王恩(かわうおん)まひしも、これ君なるべし

玉鬘尚侍(たまかづらのないし)　母夕がほの上
四のうし夕がほの上のわかれとなくして、つくしへくだる年
へて、玉かづらの巻に京への御むかへ、数ある、内侍(ないし)督(かみ)に、
ひげくろの北(きた)のかたになるなり

弘徽殿女御　母ハ二ノ月柏木一

これハげんじ十二にて内へまいり給ふ

夕霧大臣室　母ハ按察大納言の今の北方

雲ゐのかりともちゝすさひし人　ワさ付雲井

近江君　母誰さともなくおれてむし人

二条太政大臣　ワさ付太政大臣

朱雀院の母方の祖父にてはじめは右大臣明石にて太政大臣とそうせうせし人

藤大納言

頭弁　きよまさに白虹日をつらぬけりと誦せし人

麗景殿女御　朱雀院のおんとき女御にさぶらひし

四位少将　ちかきかはのきんたちしかも源氏のれいのしたしき

まつりて系しるべての父なしらとよろへし人

左中弁（さちうべん） 此二人ハ源氏物語の月松の行衛（ゆくゑ）をおほして、
弘のちんの今度よ人をつけて、ころを給し時（とき）弘徽殿（こきでん）より
出給への此をくらをしへてやくさつ果の巻よ中将のもの
をけるぞりくらもこれ人ぐ也

弘徽殿大后（こきでんのおほきさき） わきさ付弘徽殿又ハ恐哉
朱雀院の此母おつひよ皇太后（くわうたいこう）を給ゆり由けれ上よこゐ

螢帥宮小方（そつのみやのきたのかた） 系のそんの巻にこゐ

按仕大臣室（ちどのおとどのしつ） 四の君とまうしけり

五君（の） 系のそんまうしたるよ

朧月夜尚侍（おぼろづきよのないしのかみ） わきさ付朧月 おつひよ朱雀院よ來ゐて、ごろしげ殿と

まゝ母ぎみは内侍のかみ下に尼まゐり給ふ六の君とかや

右大臣（うだいじん）

このゆきとは真木柱（まきばしら）よりてうゐみえし大臣なる人なるべし

女御（にようご）　冷泉院のくらゐの時の女御まゐりし所にこの

右大臣　梅（むめ）がえにみえし大臣は是上のを此人なるべし

大殿ゝ（おほいとのばら）

修理大夫（すりのだいぶ）　此二人並ひとつ人にはあらず

梅壺（むめつぼの）女御は　今上春宮の御時よりまゐり給ひしが此中宮となされ給ひ女三の宮だにさしおきてまゐり給ひしやうきやうでんにてこそ又梅がえに麗景殿（れいけいでん）とあるも三の宮の人にや

●左大臣　竹河左大臣と号す

女　夕ぎりおとゞの御子宰相の中将かの人の女将とあへて
し時おほひろめのゐる

●右大臣　今上の御祖父おはしまし太大臣なり

髭黒太政大臣　これは右大将なりし上は左大将にて月下は右大臣にて
右大将を辞して新帝のうしろみとし給ふ太政大臣なり
を給ひし竹河はこうくるかきはがく

頭中将　源氏の大将とまうし時内侍のつかねより出給ひし人
おほやけのさはぎにてまうでとふれてまゐらせし人

承香殿女御　朱雀院の女御。今上の御母なり。ちうぐうをさとへおよ
しなれの下にあり

藤中納言　母は式部の女
桂楼に十計まで殿上し給ふ。竹河の正月に御母の内侍
の許へまうでたりし人やどりまに藤のさんの月さうひしところ

次郎君　母おなじ
まかでしらは八ぶらうまでにこゝろくれてにこゝろべきこともちの
御鎖しくたてうのゝち昇進あるべきこと

右兵衛督　母玉かづらのうへ
兄されし下に女楽の時、まやうのふえ吹なり。又朱雀院の御賀に
陵王まひし人。竹河に左近中将とこそ。同巻に右兵衛督

参りて非参議なるといへら。やがうあり藤のえんの日れ
まうろひあぢをし此人なるべし

右大弁　母おなじ

此二人むうびしれ共。六条院よりけりれそまつられし時。
ぐしてまいり給。又東宮院れ若の言ぐとけ日。おなじき蘭
日次まいり給ふる。竹河よ右中弁。同巻よ左大弁

頭中将　母おなじ

竹河よ侍従。同巻よ以中将

真木柱上　母中納言よ同

これ下よ蛍の兵部の宮の北方よあるいやうを給ふ
後紅梅大臣。按察大納言とよばれし時北方よなりし給。

まれのうちに我をもすゝめとゞめられおはしゝ人

女御(ねうご)

母玉かづらの内侍(ないし)

竹河の四月に冷泉院へまいり給ふ。父ひげくろの御子。宰相中将(さいしやうのちうじやう)

蔵人少将(くらうどのせうしやう)こゝろをしし時心つくし給ふ人

尚侍(ないしのかう)

母女御におなじ

竹河に母のゆづりをうけて内侍にならせ給ひ内へまいり給ふ

●大臣

六条御息所(ろくでうのみやすどころ)

十六にて前坊(せんばう)へまいり給ふ。秋好中宮(あきこのむのちうぐう)をうめり。

十九にてやもめとなり給ひてむすめの斎宮(さいくう)にぐして

伊勢にくだりしがおもくしてのぼりて程なくうせ給ふ　やくそく付　御息子

●大臣——女御(ねうご)

宇治の八宮の御母

●大臣　ひめ君二人うミをきてかくれ給由よしひめ君こ也

宇治宮北方　たゞしともこらしぞ

常陸殿北方　わきは浮舟ノ母

宇治家の北方のめいなりとい中将君とて家にさふらひし北方うを経て後手習の君をうめり後に常陸にぐして子共あまたうミ

●大臣

入道播磨守　近衛中将なりけるが辞して播磨守になりかの国にてかしらおろしけるにこそかれ上に徒滴をさりて深山にいりぬ

明石上　母中務親王のむすめ

松風に見えみれて大井に住しが女に六条院にうつりて冬の方

按察大納言（あぜちの）
れうくとうさて人

雲林院律師（うりんゐんのりつし）
源氏の表のをぢ法文（かもん）などをまなび給へるうさ人まこも

桐壺更衣（きりつぼのかうい）
源氏の母をうみ給て三とせといふにみまかりぬ。さうらひて
まで侍る時。輦車（てぐるま）をゆるさる。鳥辺野（とりべの）にまうす。衣。三位をおくらる

按察大納言（あぜちの）――紫上母（むらさきのうへのはゝ）

按察大納言――五節君（ごせちのきみ）
乙女（をとめ）に舞姫（まひびめ）にたちて。やがてさ

大将――東屋（あづまや）に右大将といへり
あてらのさほうげうのむすめらわり
左近少将（さこんのせうしやう）
ひたちのかみがむこ

・権中納言(ごん) 右衛門督(かみ)なりけるころ也

右衛門佐(すけ) 源氏中河のかたゝがへの時童(わらは)にてありし小君なりけり

源氏男(をとこ)にぐしてひたちへくだりをきさやにのぼりてうつせみのおとうとや

空蝉君(うつせみのきみ)

父中納言うせて後いよの介がつまになる。又ひたちになりける也

くだりし時ぐしてくだりきさやに京へのぼりて、関参るにあひけるに

とられて後尼(のちあま)になりて二条院の東のゐん(ひがし)にすみき

・右衛門督ーー女 母との尼(あま) 中将なる人の北方

うせにけりしてなるしひとこ也

・参議(さいしやう)宮内卿(くないきやう)ーー明石乳母(あかしのめのと) 母ハ院宣旨(いんのせんじ)

源氏のよしひらかて明石へくだし給、松風に姫君をそへて都へのかされ

条丈

三位中将

夕顔上

致仕のおとゞ若き人の中将ときこえしにかよひて玉かづらをうめり。後夕がほのやどりて源氏にあひ給ひしの院とかやにてものにとられてうせぬ。としは十九

宰相 — 宰相君

玉かづらの乳母。女房六条院にすみ給ひし比人は代々しる人に行方に薫にすゝみけしも此人にや

母大弐乳母

参議藤原惟光

もとめいは民部大輔といひし。女は津守にて左京大夫なりけり。梅がえに宰相

兵衛尉

章にて殿上をゆるされ。のちにうられ。五節に夕霧乃

文なかだちしにつかひたり。梅がえに兵衛尉。みぎさの身

うけたまはりしるさぬかうてまゐりし人

藤典侍（とうないしのすけ）
五節の舞姫（まひびめ）。夕霧（ぎり）おとゞの思人なれ。下に内侍佐（すけ）となる

山阿闍梨（やまのあざり）
惟光（これみつ）があにゝ。夕がほにみえたり

少将命婦（せうしやうのみやうぶ）
夕がほの巻にある

三河守妻（みかはのかみのつま）
夕がほに大弐（に）のあまれるやうしはありき

●前播磨守（さきのはりまのかみ）

源良清（みなもとのよしきよ）
若紫（わかむらさき）に殿人にてありかゞり。あしに少納言（せうなごん）
どころ。おいゞくに靫負佐（ゆげいのすけ）。又左中弁にて。近江守（あふみのかみ）を兼（けん）ず

五節（ごせち）
乙女の巻に内にまゐ（まゐる）らしをやがてさぶらふらしとも

●左中弁

弁尼（べんのあま）
宇治の宮の北方のいとこといへり
母柏木（かしはぎ）のめのと
女三宮の侍従のめのとのめい。かほる大将に昔（むかし）のことをしらせ

とし人は猶久しうしさぶらひける

伊予介（いよのすけ）

はじめは伊予のすけひたちに成てきさゝやまのゆり同巻にみえたり

紀伊守（きのかみ）

源氏方たがへの中川の家あるじ也さきや河内（かうちの）守なるかみごとも　わりとはいへさぶらひこゆる也

蔵人左近将監（くらうどさこんのしやうげん）

源氏の大将まで斎院（さいゐん）の御禊（ごけい）につかうまつりて須磨に下り給し時一人（いとこ）志てくだりし人也大将須磨（すま）のうらにおはしまさ給しおりから紀伊のかみけれどくらうのがりてゆげいのぞうになるなり松かぜまうらかへりまゐりさ

蔵人少将妻（くらうどのせうしやうのめ）

うつせみの君のまゝむすめ源氏うつせみのもめけの衣あひ

●常陸介（ひたちのすけ）
あて軒（のき）ばの荻（をぎ）をむすびばしらそてりかへらし人
もとハいよのくにの守後（のち）にひたちになる
母 まへのつま

蔵人式部丞（くら人しきぶのぜう）
あづまやに肉（?）うちられたつゐひとて白文へまいらし人
母 いま北のかた

蔵人左近将監（うこんのしやうげん）
浮舟大将音（むす）のゆゑさへして蔵人になるして我方の将監になる
母 おなし

童（わらハ）
浮舟の君とのまうとこゝろて浮舟の文をもちていかされし人
母 おなし

源少納言妻（げんせうなごんのつま）
母 まへのつま

讃岐守妻（さぬきのかみのつま）
母 おなじ

少将北方（せうしやうのきたのかた）
母 今北のかた

系北（?）

手習(てならひ)の巻にいでし中将のけんぞくなりし人

●太宰大弐(だざいのだいに)

源氏須磨(すま)におはしまししころつくしよりのぼるとて音づれまゐらせし人

筑前守(ちくぜんのかみ)　これつかひにて須磨へまいりし人

五節(ごせち)

源氏あひ給ひし人なり父(ち)にぐして須磨の巻に京へのぼる舟又明石巻にもさとめれ巻にも音(おと)づれありしとぞ

●太宰少弐(だざいのせうに)

夕がほの人のめのとのおとこ

豊後介(ぶんごのすけ)

父しにて後玉かづらを具してのぼり六条院へいたる

治し時ぞれぞの家司(けいし)にくはしかりき

次郎(じらう)

三郎(さぶらう)　此二人はゆくしにめまうけて京へものがれき

揚名妙妻(やうめいのすけのつま)　夕がほの巻にこゝ有

姉(あね)おとど　これもゆくしにわたりつきそのがれき

兵部君　まくはおてざいひさご姫君にぐしてそのがれぬ

兵部太輔(ひやうぶのたいふ)　あんぜうわかとなり

大輔命婦(たいふのみやうぶ)　母左衛門の乳母(めのと)

もとつかまつりし事(こと)源氏にかしこまりし人